様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月　 ６ 日現在

機関番号：３４３１６
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３７０３２２

研究課題名（和文）自然の制御と汚染の言説の比較文学研究

研究課題名（英文）A Comparative Study on Endeavor to Dominate and Causing Contamination on Nature

研究代表者
松岡　信哉（MATSUOKA, Shinya）

龍谷大学・その他部局等・准教授

研究者番号：５０３５１３３３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,200,000円

研究成果の概要（和文）：　本事業では人間が自然を制御すること、および人間文明が自然を汚染することを総合的にとらえる観点から、自然と人間の関係が文学においていかに表象されているかを考察した。これにより自然と人間の持続可能な関係を探り、ひいては持続発展教育のための教材作成に生かそうとした。研究成果としてWilliam FaulknerとRobert Penn Warren、またFaulknerとZora Neale Hurstonに関する論考が海外大学出版局からの共著書として刊行（後者は刊行予定）された。またDon DeLilloと大江健三郎の核表象を論じた研究発表を国内外で実施、成果は論文にまとめ現在投稿中である。

研究成果の概要（英文）：In this project, I examined literature focusing on human efforts to overpower nature and the accompanying contamination of the environment. Literature studies reveal insights into how a sustainable relation between human life and the natural realm can be developed. This can surely be a useful educational application when we develop materials for the classroom by using literature that presents environmental implications.
The outcome of the research included two books published by a foreign university press in which I argued about the representations of nature in Faulkner, Warren, and Hurston. I also made a presentation at the ASLE US at Idaho University, where I was given a useful suggestion by Scot Slovic, who is a distinguished scholar of ecocritical literary studies. This project was replaced by a new one in which I collaborate with one scholar from a different discipline and also one foreign scholar, and it has been accepted by JPSS as a funded research.

研究分野：米文学

キーワード：自然の制御　自然の汚染　比較文学

１．研究開始当初の背景

ローレンス・ビュエルは『環境批評の未来』(2006)の中で、文学・文化研究において環境論的傾向が始まったのは 1993 年前後だと述べている。またベイト(Bate, Jonathan, “From ‘Red’ to ‘Green’” 2000)は 1991 年のソ連邦崩壊へといたる一連の過程によって東西陣営のイデオロギー対立にとりあえずの終止符が打たれたことと、人類共通の課題として地球環境の問題が強く意識され始めたことは平行していると述べ、赤い革命から緑の革命への移行としてこの現象を形容している。冷戦下に核戦争の脅威が文学言説を刺激してきたのにかわり、文明が環境に及ぼす破壊的影響、および自然と人間の関係が文学主題としてこの時期に前景化した。

2011 年 3 月 11 日に起きた東日本大震災と、それに伴う福島第一原発の事故は、科学技術を基盤とした現代人のライフスタイルと自然環境の関係について、根本的な問い直しをわれわれに求めている。研究代表者は現代英米文学における自然と人間の持続可能な関係表象について研究を進めてきたが、これとの関連で、ポスト 3-11 の情況における、文学言説における「核」の表象を検証することが有意義だと考える。しかし上述したように、核および原子力の問題は、1991 年の冷戦終結以前は核戦争の問題がより前面に出ていた。また冷戦以後、特にここ十年ほどは、温暖化防止のための二酸化炭素排出削減に向けての取り組みなどにおいて原子力がクリーンエネルギーと見なされたことから、テロリズムの場合を除いて、核および原子力の問題が意識されづらくなっていた感がある。研究代表者は冷戦終結以前と以後の文学言説における核表象の問題を共通のアプローチから検証するため、科学技術による自然の制御、および制御の失敗による環境の汚染、というテーマを設定する。この課題設定により、中心課題として文学言説における核(原子力)表象の検証を目指しながら、より広範に自然と人間の関係表象をとらえてゆきたいと考えた。環境批評のアプローチで核の問題をとらえるためには環境正義の観点をとることがふさわしいが、本研究ではより広範な文学テキストにおける自然表象を取り扱うため、エコフェミニズムの観点も同時に採用した。

研究代表者は、若手研究(Ｂ)採択課題「持続発展教育のための現代アメリカ文学における持続可能性の表象研究」において、現代アメリカ文学における自然と人間の持続的な関係の表象を検証・アーカイブ化し、持続発展教育(ESD)のための教材化を試みた。2010 年の日本英文学会北海道支部で行った文学研究と ESD に関するシンポジウムを皮切りとして、研究発表や論文の形で教材化案を提示し、勤務校のゼミなどでも利用している。本研究ではこのような文学研究の成果の教育への応用の立場を受け継ぎ、核(放射性物質)表象に関する ESD 教材化をもにらんで研究を進めた。

２．研究の目的

本研究では、現代アメリカ文学と一部の戦後日本文学を対象とし、科学技術による自然の制御、およびその制御の不完全さゆえ引き起こされる環境汚染を、文学がいかに言説化してきたか検証する。第二次世界大戦から冷戦終結までは核戦争による人類の破滅が文学的想像力を刺激した。またレイチェル・カーソンの化学物質による環境汚染についての言説、例えば *Silent Spring* 冒頭の化学物質の fallout のイメージなどは、放射性物質による汚染の隠喩とも読める。本研究では、原子力技術と放射性物質の文学作品における表象を収集・分析することを一つの柱としつつ、自然の制御と汚染を巡る日米の文学言説をより広範かつ通時的に検証する。その際には被抑圧者である女性やマイノリティの問題を自然表象との関わりから論じる、エコフェミニズムのアプローチを用いた。

３．研究の方法

本研究は三年間で実施された。一年目は研究課題に関する資料収集とその精査、およびデータ整理を行い、二年目以降の研究計画の細目を策定するとともに、必要な作業・調査に着手した。二年目は「自然の制御」に関わる文学言説について、研究成果をアメリカ文学関連の国内外の学会で発表しフィードバックを得た。三年目は「自然の汚染」の言説についての研究をまとめ、国内外の学会で発表し、フィードバックを得た。研究代表者は現代アメリカ文学における持続可能性の表象研究としてさまざまな作家の持続可能性表象を検証してきており、データや知見を蓄積している。本研究ではこれらの研究成果を「自然の制御と汚染」のテーマから再活用しつつ、新たに進める研究とともに発展させることで、着実に研究を進めた。

各年度の研究の進捗は以下のとおりである。

１年目（平成 25 年度）：資料収集と精査、および個別のサブテーマごとの研究計画細目の策定。

研究課題に関わる資料収集、およびすでに蓄積されたデータや研究成果を含めた資料の本研究課題の観点に沿った精査を行い、次年度以降の個別サブテーマの方向性を画定。

研究代表者は所属機関の研究費や科学研究費補助金の支援を得て、現代アメリカ作家における持続可能性表象を検証し、国内外の学会や書籍出版で成果を発表してきた。白人作家ではウィリアム・フォークナーとゲーリー・スナイダーを中心に研究してきており、

本申請研究でも「自然の制御と汚染」の観点から両作家の作品研究を発展させた。またドン・デリーロの *White Noise* を汚染の言説の観点から検証しつつ、同作家の他作品を本研究課題の視点から検証した。

マイノリティ作家については、これまで黒人女性作家トニ・モリソンとネイティブ・アメリカン作家マーモン・レスリー・シルコーの著作における持続可能性表象の検証を進めてきた。本申請研究ではこれらの研究成果をさらに発展させ、マイノリティ作家の自然表象に迫った。具体的にはゾラ・ニール・ハーストンの自然表象を自然の制御の観点から分析、フォークナーの自然表象との比較を実施した。一年目はこれまでの研究で扱った作家や作品についての知見を発展させながら、自然の制御と汚染の表象に迫るために取り扱う対象となる作家や作品を拡張していった。

2 年目（平成 26 年度）:「自然の制御」の文学言説の検証と中間的な成果のとりまとめ

研究代表者がこれまでに研究成果を蓄積しているエコロジカル詩人のゲーリー・スナイダーにおける、科学技術による自然の制御についての批判的言説の吟味を起点とし、パール・バックの『神の火を制御せよ』における原爆製造に携わった科学者の苦悩を描くエンターテイメント的な言説などを参照しながら、文学言説が、原子力技術をいかに表象しているかを幅広く検証した。

日本文学についても同様に「自然の制御」の言説を検証した。被爆国としての日本の文学は原民喜などが直接に被爆体験の地獄絵図を描き出している。このような被爆体験の言説から、現下の原発事故について発言する村上春樹や高橋源一郎のような現代作家までを包括的に扱って、「自然の制御」についての文学言説の輪郭をつかもうとし、研究を進めた。その中で特に大江健三郎の核表象に焦点を絞り、デリロの作品との比較対照を行うべく研究を進めた。

3 年目（平成 27 年度）： 「自然の汚染」の文学言説の検証と ESD 教材化、および最終成果のとりまとめ

最終年度は「自然の汚染」の言説の検証と三年間の成果のとりまとめ、および研究成果の教育への応用の手だてを考えた。汚染の言説に属するテキストは多岐にわたるが、本研究ではキャノンとして文学史に登場するような白人作家とマイノリティ作家の文学言説を「自然の汚染」という観点から検証した。そのため核表象のみならず、より広範に自然の制御と汚染のモチーフを探索した。

研究成果は国内外の学会で発表した。また本申請研究全体の成果を論文として取りまとめ、学会誌への投稿を準備した。また Faulkner Conference で平成 26 年度に行ったフォークナーとハーストンの自然表象についての発表を基にした論文が共著書に採択された。さらに ASLE-US(米国文学と環境学会)の大会での発表を実施した。

４．研究成果

本補助事業一年目である平成２５年は、文学作品の自然表象に現れる制御と汚染のテーマについて、デリロの諸作品、および大田洋子、原民喜など日本の原爆文学を精読し、比較・考察を行った。その成果は 2013 年度日本英文学会関西支部大会における研究発表「化学物質/放射性物質による汚染の表象の比較文学的考察」において公表した。発表では、日米のテキストにおける放射性物質、あるいは化学物質の表象を検討し、１）生命の基盤となる生物・無生物ネットワークの毀損、2)持続的な内部からのダメージ、3)環境の健全性への疑心暗鬼がもたらす日常生活の瓦解、という三つの共通点を指摘した。

またフォークナーの *As I Lay Dying* を取り上げ、女性キャラクターAddie Bundren を中心に、彼女の自然、または動物との関係を論じる研究発表を行った。この発表で、男性から産む性として規定され、暴力的に自然の側に置かれた Addie が、その遺言を通して男性たちを自然・動物化することによって復讐を目論む物語として、テキストをエコフェミニスト・アプローチに基づいて解釈した。この論考は関西フォークナー研究会例会にて「抑圧される女性＝自然の反逆：エコフェミニズムの観点から Addie のふるまいを考察する」と題して発表した。

その他には、サステナビリティ学として文学研究を位置づけようとする研究ノート「持続可能性の概念と英米文学研究のインターフェイス――サステナビリティ学のための文学批評への一考察」、またアメリカのヒッピー的文学作品『禅とオートバイ修理』における仏教とサステナブルな自然・世界との関係について論じる「『禅とオートバイ修理技術』における自己と環境倫理ーー仏教とアメリカのカウンターカルチャー」の二本の論考を上梓した。

補助事業二年目にあたる平成 26 年度は、研究計画に沿って以下のように研究を実施した。

（1）先述したように自然の制御の観点から、フォークナーとハーストンの作品のエコクリティシズムの立場からの比較分析を行った。とりわけ、文学言説における自然と女性の連想関係について批判的に考察するエコフェミニズムのアプローチを採用し、両作家の作品分析を進めた。研究成果は、アメリカ文学会北海道支部談話会、および Southeast Missouri State University において開催された Faulkner Conference において発表した。これらの研究発表において明らかにしたのは、男性中心主義的な社会において抑圧される女性たちが自然として表象されていること、ならびにこれら被抑圧者が抵

抗の戦略をとる時、彼女たちが男性的な価値基準を無意識のうちに採用する陥穽に陥ることである。この研究成果は、Southeast Missouri State University Press から刊行される *Faulkner and Hurston* に収録される（目下印刷中）。

（２）自然の汚染の観点から、デリロと大江健三郎の核表象の比較研究を実施した。その研究成果は、次年度の日本英文学会全国大会、ならびに ASLE US の conference で公表した。

研究期間最終年度となる平成 27 年は、自然の制御と汚染の主題を考究する核心的モチーフとしての核の表象に特化し、国内外の学会での研究発表を実施した。

日本英文学会全国大会では、デリロと大江健三郎の核表象を、冷戦期と冷戦後におけるその変容に着目しながら論じた。その分析結果としては、冷戦期における核の表象が、閉じた自意識を反映したり、情報化社会におけるリアリティが喪失したシュミラクルのあふれた世界と結びつくものであったのに対し、冷戦後の核表象がよりリアルなモノ、と結びついた形に変化していることが、この両作家のテキストに即して実証できた。具体的には、デリロの場合には、冷戦期には核の問題が実存的な不安感やそれに結びついた死の恐怖に関連づけられていたのに対し、冷戦後は、核廃棄物の問題等、リアルな物質性と向き合う態度が現れている。また大江の場合、彼の実の息子との関係性を反映する、そのテキスト中の障がい児の形象、およびそれとの関係性が、冷戦期と冷戦後で変化しており、研究代表者はこのことを核表象との関連で考察した。

またアイダホ大学で開かれた ASLE US のカンファレンスにおいて、核表象をテーマとする発表を実施した。そこで研究代表者は、先行発表で取り上げた大江に関する論を展開させ、研究発表を実施した。

上記の研究発表は論文にまとめ、関連学会に投稿中である。また本研究を発展させた新しい研究課題が新規の科研費補助事業として採択され、すでに始動しているところである。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

① 「仏教とアメリカのカウンターカルチャー：『禅とオートバイ修理』における自己と環境倫理」松岡信哉（単著）、『龍谷政策学論集』、査読無、第 3 巻第 2 号、pp63-72、2014 年.

〔学会発表〕（計３件）

① “Kenzaburo Oe’s Imagination about Nuclear Annihilation: Environment and Endurance of Humans.” 松岡信哉（単独）、The Eleventh Biennial Conference of the Association for the Study of Literature and Environment. Moscow, US: University of Idaho、2015 年。

② 「リアルとの遭遇、想像力の臨界――Don DeLillo と大江健三郎の核表象とその変容――」松岡信哉（単独）、日本英文学会第 87 回全国大会、立正大学、2015 年。

③ "An Ecofeminist Interpretation of As I Lay Dying and Their Eyes Were Watching God: Becoming the Earth or Being made the Earth?" 松岡信哉（単独）、Center for Faulkner Studies, Southeast Missouri State University, Faulkner and Hurston Conference. Southeast Missouri State University、2014 年。

〔図書〕（計２件）

①【共著書】 “Faulkner’s *As I Lay Dying* and Hurston’s *Their Eyes Were Watching God*: An Ecofeminist Reading.” 松岡信哉（単著）、*Faulkner and Hurston*. Christopher Rieger and Andrew Leiter 編著、査読有、Cape Girardeau: Southeast Missouri State UP、2016 年出版予定（掲載決定）。

②【共著書】 “Unsustainable Freedom: The Civil War Narratives of Warren and Faulkner.” 松岡信哉（単著）、*Faulkner and Warren*. Christopher Rieger and Robert W. Hamblin 編著、査読有、81-97 頁、Cape Girardeau: Southeast Missouri State UP、2015 年。

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）
○取得状況（計０件）

〔その他〕
ホームページ等
機関リポジトリにて公開
「仏教とアメリカのカウンターカルチャー：『禅とオートバイ修理』における自己と環境倫理」
http://repo.lib.ryukoku.ac.jp/jspui/handle/10519/5457

６．研究組織
(1)研究代表者

松岡　信哉　　(MATSUOKA Shinya)
龍谷大学文学部准教授
研究者番号：50351333